

テュービンゲン便り

二〇一五年一二月 追加号

鶴と平和

思い切り晴れた青空の下、私たち日本人十五名とドイツ人五名は街一番の大きな教会前広場で、細長い机を囲みながら鶴を折りはじめた。周りには、カラフルな風船がユラユラと立ち揺らいでいる。

毎年この日、十時から十三時までテュービンゲン及びその周辺の街に住む日本人とドイツ人が集まり、世界の平和を願う活動をしている。今日は八月六日、広島に原爆が投下された日なのである。

私たちは折り紙で作った鶴を道行く人に渡したり、折り方を教えたり、また一緒に平和について話し合ったりもしていた。また、子供連れの家族には風船を手渡したりもしていた。通りにはマルクト広場の朝市に向う人も多い。その人たちの中には、私たちの横に立ってかけた、広島原爆資料館から送ってもらったドイツ語版のポスター十数枚に目を向けたり、平和運動のビラを立ち止まって読んだりもしていた。

わたしと妻それにミヒヤエルは、この催しには必ず参加している。しかし、今年はミヒヤエルがいない。彼の仲間たちと一緒に二週間の旅行にいつているからだ。年々、この活動を支援してくれる人が増え、今回は子供を含めると二十名以上ともなった。

十二時五分前になった。私たち全員は立ち上がり、広島・長崎で亡くなった人たち、それに今も放射能で苦しんでいる方々を思い、世界が平和でありますようにとの一分間の黙祷となった。そのあと、教会の鐘の音が街中に響き渡りはじめた。

三時間が過ぎた頃、このイベントのために用意した百の風船のうち、十個が残ったので、それに戦争のない世界を願う言葉を書いた小片を付け、一斉に青空へ向けて飛ばした。

そのあと、今日参加した二十名の人たちと一緒に、マルクト広場に面したところに建つ教会所属の大きな建物内に入り、バルコニーで妻と彼女の友人が準備した昼食となった。テーブルを囲んでの賑やかな時となっていた。子供も五名いて、それが一層この時を豊かにしてくれるのである。これから未来を切り拓いていく子供たちだ。彼らといると、自然と未来に希望を感じ出すのだった。

わたしと妻が家に戻ったのは、午後三時半過ぎ。毎年この日は、雨に降られたことがない。いつも天候に恵まれての活動だ。

翌日、私たちのイベント内容が新聞の地域版に載り、それを読みながらの朝食となった。それも済み、メール箱を開けると、昨日参加した日本の女性の一人から、次のような文が届いていた。

「今日は平和の祈りに参加させていただきまして、どうもありがとうございます。平和を願う方たちが沢山おられることに力をいただきました。

テーブルに寄ってくださった方々と一緒に鶴を折りながら、戦争体験を聞かせていただいたり、平和の大切さを語り合ったりできて貴重なひと時でした。また、ある人は鶴の

お礼としてさりげなく寄付をしていかれたりして、そういう姿に心を打たれました。最後に子供たちが放した風船が、真つ青な空に吸い込まれるように飛んでいった光景が、今日の一日を象徴しているようでした。

奥様には、心のこもった昼食のおもてなしに大変感謝しています。横井さんも奥さんもお疲れがでませんように願っています。お身体を大切にお過ごしください。それではまた」

なぜ、私は存在しているのか

家で昼食を摂ったあと、妻と一緒にテュービンゲンから電車とバスに四回ほど乗り換え、三時間ほどでやっと目的の地である黒い森地方のケーニツヒフェルに到着。

人口千数名のこの村は、針葉樹である合歓の木に囲まれた、とても静かな地である。ここに、あの二十世紀のヒューマニストと呼ばれたアルベルト・シュバイツァーが、奥さんと一人娘であるレーナと住んでいたのだった。住んでいたと言っても、彼はアフリカで医療活動をして、ヨーロッパに戻ると講演などをしていたので、常時ここで暮らしてはいなかった。その家は、今は国内外の人たちが見学に来るシュバイツァー館となっていた。

彼シュバイツァーは一八七五年に生まれた。二十歳から神学と哲学をドイツとフランスで学びはじめ、両方の博士号を取得したあと、次は三十歳の時に医学を学び、三十八歳の時に医学博士となった。そして、翌年看護婦の奥さんのヘレナとアフリカ直下にある国ガボンのランドレネに行き、医療活動をするようになったのだ。

当時の彼の活動は、私たちが訪れたシュバイツァー館に展示されていて、妻と一緒にそれらを読んだり写真を見たりしていた。と、彼の一つのことを遣り通していく行動に、わたしの心は深く打たれ、感動が体全体に走った。

自分の前に置かれた選択肢の中で、自分の意志で決断して、それがどんなに苦しくても、自分の生き方に確信を持ちながら、生き抜いた人なのだと思った。

彼が残した言葉の中で、

「あなたの運動がどうなるのかはわからないが、一つだけわかっていることがある。あなた方のなかで幸せになれるのは、どうしたら人類に奉仕できるかを模索し、ついにそれを発見した人々だけである」

とあった。献身的な医療活動をした人から出た言葉だ。

また、神学・哲学の博士でもある彼は、『生命の畏敬』に強く関心を寄せていた。それは彼の言った、

「私たちは生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命である」からも窺えることができるのである。それが意味することは、人は結合をなすことによって生きていられるのだ。人は社会的存在なのだ。

館内を歩いていると、オルガニストでもあった彼が弾いたバッハの曲が流れ、それを耳にしていると、彼の言葉である「人生の惨めさから抜け出す唯一の方法は、音楽と動物だ」が浮かんでくるのだった。

奥さんは軽い結核に罹り、常時彼と一緒に活動はできなかったが、夫を支え、この家

に住んでいたのである。

彼は晩年に書いている。

「私がケーニツヒフェルトにいた時のことを想い出すと、私の人生のなかで一番美しい時だった。そこでは、静かに仕事ができ、オルガンが家の中にあつて、近くの森へ散歩に出かけ、多くの友人たちがいた。よるこびに満ちた日々だった」と。

奥さんは五十七歳で亡くなり、その後、彼は一九五二年にノーベル平和賞を受賞し、平和運動、原爆反対をヨーロッパ・アメリカなどでも訴え続け、反戦を唱えた人でもあつた。そして、最期はアフリカのランベルで九十歳の生涯を閉じたのだつた。

ランベルの病院は、彼の死後もさらに大きくなって現在に至っている。彼の思いは継がれているのだ。

この館を出てからも、わたしは彼の生は無限の意味を持っていると思いつつチュービングンに戻つた。なおシュバイツァーは、実存主義のフランスの哲学者サルトルの親戚でもあつた。

軽やかな口笛

朝起きて寝室のカーテンを開けると、天気が良い。それを見た妻が、

「久しぶりに、自分の生まれた故郷である黒い森地方のクロスターライヒバッハへ行つてみてはどうかしら？」

と、言った。それを聞き、三人で朝食を摂つたあと、そこへ向つた。

澄んだ青空に、ポカリポカリと白い夏雲が浮かんでいる。電車の窓からはヒマワリとトウモロコシ、それに小麦を刈り取つた反も見える。夏の終わりを告げるような風景だ。

電車は走り続け、二回ほど乗り換えて目的地に到着。ちょうど十二時、昼食の時間である。いつもは家でおむすびを作って、ピクニックによく行く私たちだったが、今日は妻が、「クロスターライヒバッハの隣村のレストランで食事をしたい」と言つたので、そこへ行くことになった。

彼女の生まれた村にはレストランが何処にもなく、小さなカフェ店が一つあるだけ。でも、ここには五百名ぐらゐは座れるほどの大きな教会堂があつて、その横には九部屋もある牧師館が建つていた。そこで妻は生まれ、育つたのである。

彼女は語つた。

「父は三つの村を担当する牧師だったので、忙しく、また当時の牧師給は少なく、外食は家族六人揃つてできなかった。しかし、年に一回だけ、これから行くレストランで皆と一緒に食べる日があつたわ」と。

私たち三人がそこに行くと、レストラン内は満席である。外のバルコニーに座れる席があつたので、腰かけ、注文した郷土料理を待つことになった。

合飲の木が立ち並んでいるのを見ながら、リンゴジュースを飲んでみると、数匹の蜂がグラスのところに寄つてきて、ゆっくりと飲んでいられないほどとなつた。

しばらくすると、料理が私たちの前に並んだ。家ではわたしは肉料理を作らないので、妻は久しぶりに口にしたのだったのだろう、肉の盛つたお皿である。わたしとミヒヤエルはミルクアレルギーなこともあつて、無難なヌードルと野菜料理それにサラダ。三人は

「おいしそう」と言いながら食べはじめた。

義父は七十二歳で交通事故に遭って即死。わたしが妻と知り合う二年前のことだったので、義父のことはまったく知らない。彼女が父のことを話すのを聴きながら、食べ続けた。

その食事も終り、一キロ先のクロスターライヒバッハまで歩いて向った。途中、彼女は父のことを語ったり、ミヒヤエルに当時歌っていた童謡を口ずさんだり、口笛を軽やかに吹き出した。

テュービンゲンに戻る電車の中で、妻はミヒヤエルに親指を上げ、「たのしかったか」と訊くと、彼はまた親指を上げてニツコリした。わたしも親指を上に向けた。三人とも言葉のない、うれしさの表現だ。わたしはここに幸せを感じるのだった。

今日は、四十一年前に義父が亡くなった日でもあった。

『個』を自覚してこそ

「何かが違う。このままでいたら、生き生きした暮らしが心の底から感じられないのではないだろうか」

二〇一五年一〇月下旬から二週間半、わたしは日本に滞在していた。その間に二回ほどマイクを持って、若者から高齢者までの人たちの前で、ドイツの福祉事情、特にミヒヤエルが暮らしているグループホームについて語った。また、毎日様々な人たちと話したりする機会も多くあった。その時に思ったのが、左記のようなことだった。

そのような思いになったのも、わたしが二十九年間ドイツ社会にいて、『個』ということに深く意識を持ちながら、生活を送っていたからに違いない。

妻はドイツ人なこともあって、わたしは多くのドイツ人とコンタクトを持っている。そのような中にいると、特に『個の尊厳』についてよく考えさせられるのだった。

わたしは思うのだ。

「どのような人にもその人独自の存在があって、それは他の人が決して代わることできかないもの。そのことを自覚すればするほど、毎日の日常生活のなかで自然とよろこびが湧いてくるのだ。よろこびは、自分自身に近づけば近づくほど大きくなる」と。

今のドイツの民主主義の礎になっているのは、人権を『個の権利』として尊重しているからのように映るのだ。そこには、『自立』という「自己実現へ向けて、主体的に生き、実践をする」との考え軸にあるように思う。

また、実践をするからには、いくつかの選択肢から自分で判断し、責任も引き受け、多少の冒険も伴う中で行動する。それだからこそ、身も震えるようなよろこびを肌で感じ取れることもできるのだ。今の状況の中で、尻込みをしないで生きていくことが大切だろう。わたしは今もハウスマン(主夫)しながら、それを体験しているとも言える。それに、自分の個を大切にしながら暮らしていくと、他の人の『個の尊厳』をも大切に思うようになってくるのだ。

更に日本で考えたことがあった。それは、日本では至るところモノと情報が溢れ、過剰気味だったことだ。そのような中で、自分で選択し、自分にあつたものを判断するのは大変なことだと思った。人の不幸は欠乏から生じるのではなく、過剰によって起こる

のではないかとの考えになった。それに、携帯・スマホを歩きながらも、また電車の中でも操作しているのを目にしていると、

「これで果たしているのだろうか。人との真の触れ合いができるのだろうか。人間は社会的存在だし、これで触れ合いのある社会となっていくのだろうか。人との関係を浅く広くとはなっても深くはなれずに、自分の心の内をこの触れ合いのなかで表現しているのだろうか」

と、疑問に思ったのだ。わたしの家族は携帯もスマホもない暮らしをしているから、そのような考えに至ったのかも知れないが。

それと過剰と言えば、食事などをしたあと、高齢者たちが何種類の薬をビニール袋から出している場面をよく見かけた。ドイツではそう目にしない光景だ。そういえば、わたし自身、日本にいた時はそう意識もせずに抗生物質を飲んでいたことがあった。

もう一つ、考えを巡らせられたことがあった。それは、若者たちが何となくクリスタルのように映ったことだった。『個』を持つてないモノトーンのように思えたのだ。ドイツに住んでいる青年とは違うように見えた。いつも周りを、そして見られる自分を気にしているような気がしたのだった。

そのような青年に言えることは、生育する過程で、家庭での父親の存在意義を感じ取っていなかったからではないか。日本の父親は、家庭の中で自分の存在意味をしっかりと捉え、それにパートナーシップをしつかり築き上げる必要があるのではないかと思っただ。親同士が仲良くハッピーなら、子供もしあわせを感じ、自分の将来にも肯定的なものを見出すだろう。女性と子供が、伸びやかに穏やかに暮らしていくためにも、父親の意識が大切だと思っただ。

それに日本では地域創生、少子化問題、女性の地位向上との問題などが問われているが、そのどれにも関係しているのが男性の意識変革のように思えたのだった。

男性そして父親が家庭生活及び地域生活の中で居心地良い場を創っていけば、女性と子供が暮らし易い社会となると思うからだ。

働いてお金と地位を得ても、それがその人の幸せになっているのか。それよりも、その人の独自の存在が「在る」ということに生きる意義があると思うのだ。一人ひとりが生きる中で共感し合うためにも、『個の尊厳』を自覚することが大切に思えてならない。

そのような考えを持つ男性が多くなっていくためにも、国や政治家は長時間働かせないシステムや社会保障制度を充実させてほしいものだ。

三十七年間日本で暮らしていた私なので、日本にいくと、日本の社会が気になるのだ。

歴史の音を聞く

「ドイツに帰るまでにはまだ数日ある。よし、旅に出よう」

そう思ったわたしは、高崎駅から二両の普通電車に乗った。四十分ほど揺られていると、広い平野にポツンポツンとかわらぶき農家が見え出してくる。その庭先には、赤オレンジ色をした柿が実っている。懐かしい風景だ。遠方には秋の色となった山々が望め、その素朴な光景に、わたしの心は緩んでくるのだった。

自然と人間が共存する場を里山というが、まさにそれだ。時々車窓に映る自分の顔と、ゆっくり過ぎ去っていく景色が重なり、和となるような気持ちになってくる。

電車が人気のない駅にガタンと停まるたびに、中・高校生が一人二人と降りていく。旅行者が数名座っているだけとなった。陽は山の端に傾き、空がいくらか赤みを帯びはじめた。

暗くなり出した頃、電車を降りてバスに乗った。いくつかの山村を走り抜け、二十五分ほどで目的地に到着。これから二泊する宿を探せねばならない。ドイツから背負ってきたリュックを担ぎ、歩き出した。

外は暗くなっていたが、街灯の明るさで歩くには不自由はない。が、標高一二〇〇メートルの地なので、いくらか寒さを感じながら歩いていた。と、路地に民宿と書かれた看板を見つける。

玄關戸をガラガラと開けると、おかみさんらしき人が現れた。

「二泊したいのですが、空いた部屋はありますか」

「ええ」

「温泉風呂もあるのですよね」

「もちろんです。掛け湯ですよ」

「それはいい。いくらですか」

「素泊まりで四千円です」

それを聞き、迷わずここに決めた。

おかみさんに案内され、幾つかの部屋を通り過ぎ、「あさま」と記された部屋に入った。八畳の間には、小さなコタツと小さなテレビがあるだけ。おかみさんが、「お客は一人だけ。いつでもお風呂に入れますよ」と言って、部屋から出ていった。

荷を降ろしてから、少し冷えた体を暖めようとして、早速風呂場へ向った。

十人は入れそうな湯船に一人浸かっていると、額から汗がにじみ出てくる。身も心も解れ、口から歌が出てくるのだった。

「草津よいとこ 一度はおいで どんこいショ……」

湯治場でも知られ、日本一の湧出量の多い草津温泉。四十二度の湯船を出たり入ったりしてから、部屋に戻った。

蒲団は敷かれてあった。湯治の宿なので、トイレ・洗面所は共同である。建物全体が木造りなので、山小屋をふと想い出した。また、灯油の暖房なので、部屋内は石油臭かったが、これも懐かしさと呼んだ。でも、コタツ一つでも十分に暖かいと思い、石油ストーブを切って、寝る仕度に入った。

夜中、綿の詰った重いかけ蒲団だったので、目が覚めてしまう。押入れにあった軽い蒲団を二つ重ね、夜を明かすことになった。

早朝、起き出してから洗面所の冷たい水で顔を洗い、朝の散歩に出かけた。

黄色のイチヨウの葉、虹色のもみじが路地の上に横たわっている。朝の爽やかな風にそよぐ葉ずれの音が聞こえてくる。街はまだ眠っているのか、人影はない。心身ともよろこび合っているのがわかる。

一時間半ほど人気がないところを歩いてから、街の真ん中にある湯畑へ向った。

次第に温泉の湯独特の匂いがしてくる。と同時に、湯煙が見え出した。人の数も多く

なつて、中国語をしばしば耳にするようになった。彼らは盛んに写真を撮って、満足するような顔を浮かべている。

九時すこし前、近くで湯もみと踊りの実演があるとのことを知り、その館に向った。女性たち九名が、入場料を払った二百名近くの見学者の前で、湯もみの動作をしながら「草津よいとこ……」を歌い出した。わたしはそう観るものを感じなかったが、そのあとに簡素な和服姿での踊りには、「やはり、いいな」と思いつつ、魅入っていた。

朝食を摂ろうとして、湯畑の近くにあったコンビニで一パックの炊き上がった冷えたご飯と納豆だけを買ひ、ご飯をレジで暖めてもらひ、湯畑のところに戻った。そして、木の椅子に腰かけて、湯気が立ち昇る白いご飯に、納豆二箱をかけて食べ出した。

これが旨いのだ。一流のホテルでのレストランで食べるよりも、何と美味しいことか。口の中で、ご飯と納豆の糸が微妙に混ざり合う味。納豆を食べて、日本人を知る思いとなつた。

前を通る観光客のなかには中国人もいて、こちらにシャターを向けている。そんなことにお構いもなく、この贅沢な味を堪能するわたしだった。納豆三昧だ。

宿に戻り、コタツのスイッチをつけてからすこし横になると、足全体がホカホカしだしてウトウトとなつた。

目が覚めると、三十分が過ぎていた。今度は日本の情緒を誘う露天風呂へ行くことにした。おかみさんから場所を聞き、そこへ向った。途中、至るところで観光客の姿を多く見かけようになつた。その中には、浴衣姿の男女もいた。

目指す大滝乃湯に行き、九百円を払って内に入った。広い湯船の大浴場ですこし体を沈めてから、木造つくりの外にあつた露天風呂に入った。前に映る木々の秋の葉を見ながら、溢れ落ちてくる湯の中で身を委ねていると、心の弛緩を感じ出す。只管浸っていた。

そのあと、建物内にあつた合わせ湯というところで、三十八度から四十六度の異なる熱さを順に巡っていく入浴法で四十五分ほど過ごしていた。まさに温泉三昧だ。日本人でいるよろこびだ。

この館を出ると、お腹が減っているのがわかる。そこで、先ほどご飯と納豆を買ったセブンイレブンで見かけた、わたしの大好物である助六寿司を食べようとして、そこへ行った。

さいわい、その寿司は棚に一つ残っていた。それを大事そうに抱え、店を出た。

十分もすると、至るところ紅葉した木々が並ぶ西の河原公園前となつた。ベンチに腰かけ、先ほど買った助六寿司を食べはじめた。酢の効いたイナリ鮭、それに太巻きに入っている卵焼き・味のついた椎茸・かまぼこなど、口に入れるたびに胃がよろこびあっている。贅沢な時間だ。これがぜいたくと思うような、今のわたしの生活様式に感謝だ。

食べ終え、また歩き出すと、露天風呂へ至る小道となつた。傍を流れる小川からは、湯気を立てながら温泉が湧き出ている。二時間前に他の露天風呂の湯に浸っていたので、体が意外と疲れている。近くの山道をゆっくり歩くことにした。

晴れて抜けるような青空の下、人影がほとんどない土道をゆっくりと登りはじめた。秋風に揺れながら、紅葉した葉が時々ひるがえっている。若い頃によく見かけた秋の素朴な風景だ。アツ、赤い葉がまた風に舞つた。

サクサクの音を聞きながら歩を進めていると、忘却していた日本への回帰が心に溢れてくるのだった。歩き続けた。

陽が山の奥に没しはじめたので、帰ることにした。

再び公園に戻り、近くにあったそば処で、あたたかい山菜ソバを食べ出す。さすが手作りだけあって、麺に腰があつて旨い。最後の一滴まで汁を飲み干してから、店を出た。宿に向う途中、スーパーマーケットの看板を目にする。何かを買う積もりはなかったが、足が自然とそちらへ向った。

サンマ一尾百八十円だ。それを眺めていると、熱く焼いたサンマに醤油をかけた時にジーツと発する音が耳元に聞こえてくるのである。溜め息が漏れた。

みかん六つ、それに温泉饅頭二つを買い、スーパー店を出ると、外は夕闇に閉ざされていた。

宿の玄関戸を開けると、おかみさんが奥から出てきて、

「主人もいます。掘りコタツに入りませんか」と誘われたので、

「ええ、それはいいですね」と答えて、ご夫妻と話すことになった。

六畳の間にはコタツがあつた。そこに足を投げ出した。と、体全体が暖まってくる。

「この宿をどのくらい前から営んでいるのですか」

「以前、私たち夫婦はスキーの板と靴を貸し出していたのです。もう二十年前のことね。今はこの民宿を主人と二人で経営しています」

ここでの今と昔の暮らしについて、わたしと同世代のおかみさんは生き生きとした声で語り出した。隣には優しくそうな旦那さんがニコニコした顔でいる。今もこの歴史を引き継いでいる二人の話に、耳を傾け続けた。草津温泉街の歴史の声だと思った。

笑いの入った会話は実にいい。旅のたのしさは、自分と違う文化・風土に接している中で、様々な人の人生観や価値観に出合うことだ。それによって、自分の感性が磨かれて謙虚になり、自分が忘れかけていたものを再び思い起こさせてくれて、感動したりするのだ。

ご夫妻と二時間ほど談話してから、冷えきった部屋に戻り、コタツに入りながら、先ほど買ったミカンと饅頭を食べ出した。コタツに足を投げながら思った。

「明日の朝、この宿の風呂に再び入り、掛け湯をかぶろう」と。

編集後記

久しぶりにテュービンゲン便りを発行します。一ヶ月前に日本で体験し、思ったことを書きたくなり、今回追加号として皆さんにお届けします。これも以前当便りを読んでくれていた人がいたからで、そのことに感謝するのです。

横井 秀治

編集発行 横井秀治

Neckarhalde 12, 72070 Tübingen Germany

TEL 07071-24235

Eメール hidejigm@hotmail.com